

持ちはずうつと複雑なままだった。

給食といつても、おかずと牛乳がでるだけだったが、土曜日はそれさえない。ただ午後の授業がないだけだ。

さっさと掃除を終わりにしての帰り道、和雄が今日は釣りがしたいといいた。良夫は覚悟をきめるしかなかった。

「おれさあ、今市に行かなくちゃなんなんだ」

背も体も大きい和雄を見上げるようにいった。

「ああ、悟一やん、入院してんだもな」

と、和雄はいって、**A**、釣りは日曜日にようということになった。良夫は体をこわばらせていたものがとれたような気がした。

「釣りなんか、しばらくしていねえな」

良夫は春の空気を思い切り吸いこんでいった。

「しょうがねかんべ、冬は釣れねも」

和雄はそういつてから、

「でもいいなあ、今市に行けるなんて」

と、うらやましそうな声をだした。

そのとき、十二時半のバスが下小林に向かって下っていった。もうもうと砂ほこりをあげ、良夫たちを田んぼの中に追いやった。良夫は一時に下小林をでる今市行きに乗る。

悟一の病室に届けるたくわんは、今朝年子が用意して置いてくれた。短めのたくわん二本を真ん中で切り、四本にして、新聞紙で二重に包んだ。それが風呂敷包みになって、囲炉裏の脇に置いてあった。

バス賃は往復で百円だけど、二百円もらった。

よせて、姿勢を正して前を向いて座りなおした。すると、さっきまで気にならなかったたくわんの匂いが強烈なのに気がついた。

——誰も後ろにこなければいい。良夫はもたもた乗ってくる乗客を気にしだした。前から順に席が埋まってくる。そして、いちばん最後に乗った小太りのおじさんが奥の方に歩いてきた。

良夫は目をあわせないように窓の外に目をやった。そのときだった。走りだしたバスに揺れながら席をさがしていたおじさんが、うつという声をあげた。そして、

「くせえ、なんだこらあ」

と、他の乗客にも聞こえるような大声をだした。

前の方の乗客が振り返ったような気がして、思わず視線をバスの中にもどしてしまった。小太りのおじさんが鼻を良夫の方につきだして、くくんやっていた。

「なんだか、奥のほう、くせえんだわ」

小太りのおじさんは、みんなにうみたいにして、三つくらい前の席に腰を下ろした。

誰もそのおじさんのことは相手にしていないみたいだった。でも良夫は風呂敷包みを膝の上にのせ、窓を一センチくらい開けた。たくわんの匂いがより強烈になってきたような気がした。

一人二人が乗り降りして、乗客は増えなかった。良夫はほっとした気分、一センチの窓の空気を吸っていた。もっと窓を開けたら、バス中に匂いが流れる。そう考えて、自分の鼻にはいつてくる匂いはがまんした。

ちよつと進んでいる柱時計は一時を指していた。良夫はランドセルを囲炉裏の脇に放りだすと、風呂敷包みを下げて家をとびだした。

一時に下小林の車庫をでたバスは、良夫の乗る農協前まで十分はかかる。十分間に合う。それでも良夫は走った。走りながら、一度ポケットに入っている百円札二枚を確かめた。

バス停で、良夫はかなり待った。バスを待ちながら、やはり今市の町に行くのが楽しみになった。ひさしぶりの町の中、長い時間バスに揺られるのもいい、わくわくした気分だ。

しかし、そのわくわくした気分をしずめるように、悟一の寝ている姿が頭に浮かんできた。すると、じっとしていられないほどいらだた気持ちになった。

——父ちゃんの見舞いに行くんだから……。自分をぴりつとさせるつもりで自分にいい聞かせた。しかし、農協の倉庫を曲がって、一見トラックのようなボンネットバスが顔をだすと、思わず顔がにやけてきた。

バスには、前の方に五人ほど年寄りがかたまつて乗っていた。良夫は一番後ろの席にむかった。

左側の窓にびったりくっついて、風呂敷包みを体の右側に放りだした。そのとき、ちらつとたくわんの匂いが鼻に入ってきた。

いちばん乗客が多いのは郵便局前だった。宇都宮へ行くバス停といつしよになるし、市役所の支所もあるし、診療所もある。農協前の次のバス停だった。

やはりバス停には乗客の列ができていた。良夫は風呂敷包みをひき

バスは砂利道に揺れながら、もたもた走っている。良夫にはそう思えた。早く病院のある相生町に着いて欲しかった。

窓の外はまだ田舎道の風景が続いた。ようやく車掌さんが回ってきて、良夫は切符を買った。若い車掌さんは小太りのおじさんのように顔はしかめなかつたが、早く入り口にもどってほしいと思った。

「大室十文字過ぎたら、すぐ今市だから、ようく車掌のいつてるの聞いてんだぞ」

と、年子がいつていた大室十文字が近づいたらしい。

「次は大室十文字、次は大室十文字——」

車掌さんのかわいらしい声が響いた。

窓の外から、桜吹雪の下に並んでいる、五、六人の人が見えた。

良夫は窓際にぴったりはりついた。入り口を最初に上ってきたのは、きちんとした洋服の似合う学校の先生のような女の人だった。その人は真つ直ぐに席の空いている奥にむかってきた。

良夫は前の座席から目だけをだして、女の人を見ていた。勢いよく進んできた女の人が、良夫を見たとき、足を止めた。顔をあげた様子から、たくわんの匂いをかいだような気がした。

その女の人は一歩二歩下がると、小太りのおじさんの後ろの席に座った。そこから順に席が埋まっていき、五人目と六人目のおばさんは、二人で良夫の前の席に座った。そして、座ったとたん、窓側の人、「なんか、この席、臭くねえげ」

と、もう一人に聞いた。

「うん、くせえわ、なんだんべ、この匂い」

その人が鼻をくんくんさせているようだ。良夫はいつぶりむかれるか、

Bが **B**ではなかった。

良夫は、風呂敷包みをジャンパーの中に入れた。チャックも胸の上まで閉めた。強烈な匂いがまともに鼻に入ってくる。目に突き刺さるような匂いだった。チャックを閉めると、汗ばんでくるほど暑くなった。良夫は暑さも匂いもがまんした。苦しくなるようながまんを続ける、無性に悲しくなっていた。

バスがスピードをあげて、窓の外の並木の桜がよけいに散りだした。桜吹雪が川のように流れている。良夫にはそれが、いつの間にかたまたまっていた涙でにじんで、渦を巻いているように見えた。

ぼたぼたと涙が、油臭い床で玉になった。しかし、良夫はたくわんを持たされたことを恨まなかった。悔やみもしなかった。自分がバチ当たりなことをしたからなのだと思った。

そして、良夫は初めて、バチは自分に当たったのだと気がついた。血の滴るようなお題目が目には浮かんた。

——バチは父ちゃんに当たったんじゃない。そう考えたとき、なぜかうれしいことのように思えた。こわばっていた体の力がすうっとぬけていった。

⁶ 良夫は丸めていた背中を真つ直ぐにすると、ジャンパーの中のたくわんを抱くようにして、脚を張った。すぐ涙が乾いてきた。

そして悟一がたくわんをうまそうに食う姿を思い浮かべた。ぱりぱりという音まで聞こえてきた。良夫は悟一の前で、口笛を吹いてやろうかと考えていた。

(高橋 秀雄 『やぶ坂に吹く風』による)

*年子＝良夫の母。

*お題目＝あざやかな赤い文字で「南無妙法蓮華經」と書かれているお札。

*和雄＝近所に住む良夫の同級生。

*今市の町＝現在の栃木県日光市の一部。旧今西市。

問一 ——線部1「その気楽さが今日は良夫をほっとさせた」とありますが、これを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 良夫は悟一のけがの原因が仏様を怒らせたことにあると考えているが、バチのことなどつゆほども考えない年子の現実的な態度に接して、仏様をおそれる気持ちから解放されたということ。

イ 年子の楽天的な語り口は、悟一のけがに責任を感じて悩む良夫の気持ちを考えてのものであり、けがの程度が軽いと知らされた良夫は恐怖心をやわらげることができたということ。

ウ 家族の一大事に際してもいつもと変わらない様子でのんきな物言いをする年子だが、人知れず仏様のバチにおびえている良夫はそうした態度にむしろ気の休まる思いをしているということ。
エ お供え物上げることが仏様の怒りをしずめるのに効果的であると信じている年子の冷静な対応を目的の当たりとして、やみくもに仏様をおそれていた良夫は安心感をおぼえたということ。

問二 ——線部2「気持ちはずうっと複雑なままだった」とありますが、このときの良夫は、町に行くことができずうれいと思う反面、それを手放して喜ぶことができないでいます。それは「むやみに和雄をうらやましがらせてはならない」ということその他に、どのような理由からだと考えられますか。次の文の□に適切な二十字以上、二十五字以内のことばを補うかたちで答えなさい。なお、解答には「用事」という語を用いること。

町へ行くのは□から。

問三 □Aには、「順調に事が運ぶさま」を意味する擬態語が入ります。これを「す」で始まる四字のひらがなで答えなさい。

問四 — 線部3「じつとしていられないほどいらだつた気持ちになっ

た」とありますが、この理由を説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 町に行くことができる喜びにひたっていたにも関わらず、ふと

悟一の様子を想像したことで楽しい気分が台無しになってしま

い、現実にも引きもどされたように感じたから。

イ 町に行くことができるまたとない機会であるのに、その目的が

お使いであることを思い出して、自由に遊ぶことができない状

況を苦々しく感じたから。

ウ 町に行くことができる喜びをかみしめるほどに、けがで苦しん

でいる悟一があわれに感じられて、悟一にバチを当てた仏様に

強い憎しみを感じたから。

エ 町に行くことができる喜びに心をおどらせていたが、入院中の

あわれな悟一の姿を思い浮かべたとたんに、うわついた気分

でいた自分自身を許しがたく感じたから。

問五 — 線部「ちらつとたくわんの匂いが鼻に入ってきた」「さつき

まで気にならなかつたたくわんの匂いが強烈なのに気がついた」「たくわんの匂いがより強烈になってきたような気がした」とありますが、こうしたたくわんの匂いについての描写の移り変わりは、良夫のどのような気持ちの変化を表したものでか。三十五字以上、四十字以内で説明しなさい。

問六 — 線部4「勢いよく進んできた女の人が、良夫を見たとなん、

足を止めた。顔をあげた様子から、たくわんの匂いをかいだような気がした」とありますが、このときの良夫の様子を表す漢字四字のことばとして最も適切なものを次の中から選び、そのことばの最初の漢字を一字で答えなさい。

- 1 ギシンアンキ
- 2 ゴリムチュウ
- 3 アンチュウモサク
- 4 ムチモウマイ

問七

□ Bに共通して入る漢字一字を答えなさい。

問八 — 線部5「バチは自分に当たったのだと気がついた」とありま

すが、このときの「バチ」について説明した次の文の□ I~IIIに入ることばを、指定された字数にしたがって本文中からそれぞれ抜き出して答えなさい。

人目を気にしながら、□ I(五字)と□ II(二字)に耐えなければならぬという、□ III(十一字)をすること。

問九 — 線部6「良夫は丸めていた背中を真っ直ぐにすると、ジャン

パーの中のたくわんを抱くようにして、脚を張った。すぐ涙が乾いてきた」とありますが、このときの良夫について説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 家族を思いやるやさしい心根の持ち主である良夫は、自分の行いの報いとして父がけがをってしまったことに胸を痛めていたが、バスの中でのつらい出来事が自分へのバチだと考えることで、仏様の怒りが父に向いたわけではないと考えるようになった。その発想によって良夫の気持ちは軽やかなものとなり、自分が置かれている現在の苦境に正面から立ち向かう勇気を得た。

イ 家族思いの良夫は、自分の軽率な行動が仏様の怒りをかい、父

にけがをさせてしまったことに胸がふさがる気持ちでいた。姿形は見せないものはつきりとその存在を感じさせる仏様に対して強い恐怖心を抱いていたが、バスの車内でつらい思いに耐えながら自問自答することで、仏様を信じる気持ちよりも、現実の問題と向き合う強さが大切だと気づいた。

ウ 家族を大切に思う素朴な心の持ち主である良夫は、自分の身勝手な行いが父に災いをもたらしたと考えて罪悪感にさいなまれていたが、町へ向かう道中でつらい経験をする。そして、それが自分の身にふりかかったバチであり、ようやく父と同じ痛みを経験することができたと理解することで、父と子のつながりをいっそう強いものとして実感した。

エ 家族を大切に思う素直な性格の良夫は、ばちあたりな自分のふるまいが父を苦しめることになったと考えて重苦しい日々を過ごしており、町へ行く用事ができても浮かれることはなかった。しかし、バスの車内でつらい思いをして、ようやく罪をつぐなう機会を得られたことで気持ちもやわらぎ、父に笑顔で会うことができた心の余裕をとりもどした。

五

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数指定がある問いに答える場合、句読点・かぎかっこ等の記号は一字として数えること。)

あなたが道端にたんぽぽの花が咲いているのに目をとめて「きれいだ」と感じたとき。これを脳科学では次のように説明します。「たんぽぽから出た光があなたの眼球を通過して、網膜にたんぽぽの像を結びます。その刺激を視神経が脳細胞に電気信号でつたえ、脳細胞から心地よさを増幅する脳内物質が出て、それに反応した感覚中枢が興奮し、〈きれい〉という感覚を生み出すのです」。どうでしょうか。これが「きれい」と感じるしくみだそうです。

「へえ」と他人事みたいに思うでしょう。自分の脳内でそういう反応が起きているなんて、自分自身にはわからないので、コメントのしようがないでしょう。じつはこの説明にはかなり難点があるのです。まず、その脳内物質がなぜ「きれい」という感覚を生み出すのか、つまり物質から心(感情や精神)が生まれるしくみが全然わかりません。もう一つは、あなたの目の前のたんぽぽとあなたの脳が受けとった電気信号のたんぽぽは、ほんとうに同じものかどうか確かめようがないということ。あなたが「きれい」と感じたたんぽぽは、どちらでしょうか。たぶん目の前の方だと答えるでしょう。しかし、それは脳が確認してはじめて「きれい」と感じるのですから、脳内のたんぽぽかもしれない。脳内のたんぽぽにきれいと言うはずないよ」とあなたは反論するかもしれませんが、脳内のたんぽぽがなければ、い

たの心の中に「きれい」という感情が生まれた、と説明するのが「二元論」です。現代人はだれでも、この誘惑に乗ってしまいます。それは一元論ではどうなるのでしょうか。たんぽぽの花があなたに「きれい」という感情を引き起こしたのではなく、たんぽぽそのものが「きれい」なのです。「でも、きれいと思わない人もいるんじゃない」と言いたくなるでしょうね。そういう人にはたんぽぽそのものが「きれいじゃない」のです。だって人それぞれに好みはありますから。

「でも、悲しい気持ちの時に、たんぽぽを見て、気持ちが変わるのは、たんぽぽが原因で私の心が変わったということでしょう」と反論するかもしれません。そう考えるのはすでに二元論にはまっています。たんぽぽを見つめるあなたとたんぽぽは一体となっているから、そう感じるのです。これが一元論のとらえ方ですが、この見方を私もみなさんも失おうとしています。

なぜ、あなたはたんぽぽを「きれい」と感じたのでしょうか。たしかに、なかなか説明しにくいものです。一元論では「B」と言うしかありません。そこで一元論の世界にもどっていくために、たんぽぽを「きれい」と感じながら「見とれている」あなたを想定してみましよう。すっかりたんぽぽの花に見とれているあなたは、たぶん自分をも忘れて、花と同じ世界にどっぷりつかっているのです。そうするとたんぽぽの方もあなたを見ているような気になります。そういうときには、自分も生きものだという感じになり、生がつながっている生きもの同士という感覚になっているのではないのでしょうか。

「そんな気持ちで見とれているわけじゃないけど」と反論したい気持ち

くら目の前のたんぽぽを見ても認識できないのですから、簡単に決着はつきません。

これは科学では解決できない「心脳問題」あるいは「心身問題」と呼ばれている哲学の難題なのです。しかし、何かあほらしい気がしませんか。たんぽぽと自分の脳を分けるから、こういう問題が生まれてしまうのです。

科学では「自然」とそれを見ている「人間」を分けてしまっています。これを「自然を対象化する」と言います。それから、自然を分析し始めます。「たんぽぽをきれいだと感じるのは、花卉の黄色の色と、八重になつている形と、すつと花茎が立ち上がっている形態が原因です」と言われても、何か興ざめですよ。きれいなものはきれいだと感じる、それでいいんじゃないと言いたくなりますよ。

*小林秀雄さんは「薔薇の美しさというようなものはない。ただ美しい薔薇があるだけだ」という名言を残しています。もともと私たち日本人は、自然をあれこれと分析することを「A」なことだと感じてきました。ところが科学は自然を分析するために、対象とそれを観察する自分を分けてしまいます。薔薇をその色やかおりや花びらの形に分解して、美をさがせばさがすほど、相手の薔薇は美しい薔薇ではなくなつていきます。薔薇そのものが美しいのに、と言いたくなります。

このように相手の生きものと自分を分けななことを「一元論」と言います。日本人の自然の見方、感じ方はもともとは「一元論」だったのです。

「たんぽぽがきれい」だと感じたときに、たんぽぽが原因で、あなたもわかります。無意識までさかのぼって思い切つて言葉にしているのです。自分を「自然の一員だ」と感じている日本人が圧倒的に多いのは、自然とつながっているような気になるときに、生きものとして生きていることのうれしさが押し寄せてくるからではないでしょうか。これは向こうからやってくるような感覚です。「受け身」の感覚です。自分から何かやるのではなく、しだいに包まれていくような感じ。現代人は、二元論になんてまっていますので、つい自然の価値や機能をさがしたりしますが、自然を眺めているときには、そういう気持ちは忘れていきましょう。

自然に近づき、自然と一体化すればするほど、人間であることを忘れることができます。先人の百姓たちはこの心境を「忘我」の境地と呼びました。私なら「人間も生きものだから、自然だから」と言いたくなります。私たちは自然に見とれるときに、自分の中の自然なもの融合させているのです。

自然の花にひかれ、花に見とれるあなたのおまは、とても自然なのです。なぜなら人間という生きものはそういうものなのです。

自然を「きれいだ」、つまり「自然だ」と意識するのは、何よりも風景を眺めたときではないでしょうか。みなさんはどういう時に風景を眺めますか。生きものを見つめているときには風景は見えません。私たち百姓も、仕事をしているときには風景は見ません。私が風景を眺めるのは、仕事の手を休めるときです。畦に腰を下ろして、一服するときは、なぜ風景を眺めるのでしょうか。たぶん「気持ちがいいから」と答える人が多いでしょう。私もそうです。

でも、なぜ気持ちがよくないのでしょうか。「自然があふれているから」と答えたくありません。風景は天地自然がその姿を現すときです。「風景が目飛びこんでくる」という感覚はありませんか。見ようとする前に、向こうから飛びこんでくるのです。まるでトンネルを出て、急に視界が開けてきたような感じに似ている時がありませんか。自分が見るといふ行為をしなくても、見えてしまうのです。この感覚が風景の醍醐味です。

なぜなら主役は風景の方に(天地自然の方に)あるからです。私たち自身がいつも天地自然の一部だからです。そのことをつい忘れていてふと「気づく」と天地自然に囲まれているのです。その「気づいた」時の天地自然の姿が風景なのです。これが私たちのありふれた日常の風景というものです。

ですから、すぐに忘れてしまいます。昨日見た風景で思い出すことができるものは、ほとんどないでしょう。それでいいのです。

C 旅行すると、事態は一変します。ふだんは見ることがない、他所の目新しい風景が目飛びこんでくるからです。新鮮で、発見があります。昔から「風景は旅行者が発見する」と言われてきました。C、毎日毎日、旅行者のように目新しい風景を目にするなら、それは通常ではありえないことであって、すぐに疲れ果ててしまうでしょう。じつは風景はありふれた在所の風景が一番いいのです。自分が生きている世界を内側から見ると、味わっているからです。このようにありふれた風景は特別でなく、自然な感じがするから、意識せずいいものなのです。

問二 ――線部「自然」とそれを見ている「人間」を分けてしまいます

「それから、自然を分析し始めます」とありますが、この過程の具体例として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 名画といわれている作品について、その絵の構図や色づかい、使われている材料などの要素を調べあげて、その絵の評価が高い理由をさぐること。
- イ 体の具合がなんとなく悪いと感じたので病院へ行き、採血をして血液の状態を調べたり、レントゲンを撮って臓器に異常がないかを調べたりすること。
- ウ 世界的に活躍しているスポーツ選手にあこがれて、その選手の細かい動作まで映像で確認することで、自分のプレーの参考にしようとする事。
- エ ある作曲家がつくった音楽作品に強い感動を覚えたため、その作曲家の他の作品を聴いたり、自分で演奏してみたりして、同じ感動を得ようとする事。

*小林秀雄『評論家』(一九〇二―一九八三)。

*畦田と田の間に土を盛り上げて作った境界・通路。

*在所に住んでいるところ。生まれ故郷。

問一 ――線部1「物質から心(感情や精神)が生まれるしくみが全然わかりません」とありますが、これを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 脳内物質が感覚中枢を興奮させることと、「きれい」という感覚が生まれることとの関係性を科学的に説明することはできないということ。
- イ 脳内物質によって感覚中枢が興奮して「きれい」と感じる仕組みは科学的に説明できるが、それを自分の身体で実感することは不可能だということ。
- ウ 心地よさを増幅する物質が脳内で分泌されることは観察できるが、それによって感覚中枢が興奮するかどうかは個人差があり科学的に説明できないということ。
- エ 脳内物質のはたらきについて分析する脳科学と、たんばぼを見て「きれいだ」と感じる心のはたらきを解明する学問とは研究対象が異なるということ。

問三 A に入ることばをこれより前の本文中から三字で抜き出して答えなさい。

問四 ――線部2「そう感じる」とありますが、「そう」が指し示す内容として最も適切なことばを本文中から八字で抜き出して答えなさい。

問五 B に入る最も適切なことばを、これより前の本文中から十一文字で抜き出して答えなさい。

問六 ――線部3「すっかりたんばぼの花に見とれているあなたは、たぶん自分をも忘れて、花と同じ世界にどっぷりつかっている」とありますが、これは何をすることだと言いかえることができますか。次の にあてはまることばをこれより後の本文中から六文字で抜き出して答えなさい。

すること。

- 問七 — 線部4「自分から何かやる」とありますが、これを説明した
ものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 自然を一元論でとらえることで、生きものとしての喜びを積極的に感じるようにすること。
- イ 自然を一元論でとらえて自分自身と融合させることで「忘我」の境地に至ること。
- ウ 自然を二元論でとらえて、無意識に感じていることを思い切って言葉にしようとする事。
- エ 自然を二元論でとらえて対象化することでその価値や機能をさがそうとすること。

- 問八 — 線部5「この感覚が風景の醍醐味です」とありますが、これを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 注意して見ようとしなくても、目に飛びこんでくるように発見される自然の姿によって、自分も自然の一部だと実感できる感覚こそ、失われつつある本当の人間らしさだということ。
- イ 思いがけないときに姿を現す自然は、自分が見ようとしなくても見えてしまうこともあれば、見たくても見えないこともあり、そのとらえどころのなさに風景の奥深さがあるということ。
- ウ ふとした時に風景を眺めて、ふだんは自分もつけこんでいることで気づくことがない、自分を取り囲んでいる自然の姿を実感するところにしみじみとしたあじわいがあるということ。
- エ 目新しい風景を目にして、自分が生きている世界を内側から見えてあじわうことよって、自分が天地自然に囲まれていることを発見できるところに面白みがあるということ。

- 問九 Cには同じ意味をもった接続詞を補うことができます。この接続詞を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 前の文の内容が後ろに続く文の原因・理由となることを表すもの。
- イ 前の文とは逆の意味を持つ文が後ろに続くことを表すもの。
- ウ 前の文と後ろの文で二つ以上の事柄を並べて述べることを表すもの。
- エ 前の文であつかった内容について、後ろの文で別の言い方を用いてくり返したり、例をあげたりすることを表すもの。

- 問十 筆者は本文中で、「二元論」と「二元論」というものの見方をそれぞれ説明しながら自分の考えを述べています。これをふまえて本文の要点をまとめた次の文章のI・IIにあてはまる語句をそれぞれ十字以上、十五字以内で答えなさい。

I 方法では自然の美しさを理解することはできない。人間が自然を美しいと感じるのは、II ときなのだ。

六

次の文章は小学五年生の「ぼく」と、「ぼく」の家に住みつく猫のペネトレとの対話です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ぼく 「すごく根の明るい人が、自分の遊びのためにしょっちゅう他人をひどいめにあわせるとしたら、どうなる？そういう人は、やっぱり悪い人でしょ？ 悪い人であるってことは、やっぱりたいへんなことだと思うな。善悪っていうのはやっぱりだいじだと思うな。」

ペネトレ 「そもそも善いとか悪いって、どういうことかね？」

ぼく 「それはよくわからないけど……。」

ペネトレ 「でも、自分の遊びのために他人をひどいめにあわせるやつは、悪いやつなんだろう？ それはなぜだい？」

ぼく 「……他人がいやがっていることをするからかなあ。」

ペネトレ 「他人がいやがっていることをするのが、なぜ悪いことなんだい？」

ぼく 「なぜって、……それが『悪い』ってことの意味じゃない

かな。」

ペネトレ 「なるほど。だとすると、逆に、他人がしてもらいたいと思っっていることをするのが『善い』ということの意味になるね？ たくさんの人がすごくしてほしいと思っっていることをパンパンやればやるほど、すごく善い人で、逆に、多くの人がしてほしくないと思っっていることをどんどんしちゃえばしちゃうほど、すごく悪い人だ、ってことになるね？」

ぼく 「そうなんじゃない？」

ペネトレ 「だとすると、多くの人が、麻薬をすごくほしがっていて、いま持っている麻薬を取りあげられたくない、と思っっているときには、どんどん麻薬を与える人が善い人で、麻薬を取りあげるような人は悪い人だ、ってことになるね？」

ぼく 「うーん。それはおかしいね。その場合は、逆だなあ。だとすると、1？」

(永井均 『子どものための哲学対話』による)

問一 ——線部1・2・3それぞれの文が対話の中で果たしている役割を説明したものとして最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 確かなことだと思われる事柄も、時と場合によってはまったく異なったとらえ方ができるといふ点を指摘して、かくれた問題点を明らかにしようとしている。

イ 多くの人が正しいと考えていることでも、一部の人にとってはそうではない可能性をしめすことで、正解が一つではないことを理解させようとしている。

ウ 当たり前だと思われることにあえて問いを投げかけることで、それまで考えもしなかった問題について深く考える機会をつくっている。

エ 何気なく使っている言葉の意味を問うことで、その言葉の内容のあいまいさに気づかせ、議論を深めるきっかけをつくっている。

オ すでに意味が決まっている言葉について問いを投げかけることで、言葉が新しい意味を持ち、使う人間の考え方で変化する事実を伝えようとしている。

問二 1には、「善い」とは何か、「悪い」とは何かを追究して

く対話を通じて導かれた問いが入ります。この問いの内容を一文で書きなさい。

